

小学部の実践

VI 小学部の実践

1. 小学部の授業づくりの構想

(1) 小学部で目指す児童の姿

本校小学部の教育方針として「さまざまな活動を経験して学ぶ力を育む」「友だちや先生とのかかわり合いを広げる」がある。この教育方針を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの視点から授業を考える際に、「主体的とはどのような姿か」、「対話的とはどのような姿か」ということを考え、目指す姿を設定した。

本校がこれまで行ってきたキャリア教育の研究から得た知見により、小学部段階においては、特に、児童が自分の好きなことや得意なことに気づき、主体的に楽しく活動する経験をするのが大切であると考えている。そこで、主体的・対話的な姿として、小学部段階においては「経験を通して、興味関心を広げる姿」「自分と友だちが相互に作用しあいながら学ぶ姿」であると考え、目指す姿とした。

(2) 小学部でつきたい力

「共に学び、自分を表現する力」

主体的・対話的で深い学びを繰り返し経験することによって、小学部段階では「共に学び、自分を表現する力」を児童たちにつけてほしいと考えている。そして、小学部のつきたい力を設定するにあたって、各クラス（低学年・中学年・高学年）でどのような力が必要かを昨年度の実践を踏まえ、具体的に示した（表VI-1-1）。

表VI-1-1 各クラスにおける具体的なつきたい力

低学年	みんなと同じ場にいることができる力。クラスの教師や友だちに注目し、自分もやってみたいと思ったりそれを伝えたりする力。
中学年	友だちの様子を見てわかる、判断する、自分で考える力。「できた」、「わかった」を表現する力。
高学年	みんなで一つの物を作ったり、一つの事を成功させたりするために活動に取り組む中で、達成感を感じたり、思いを伝えたりする力。

上記のように各クラス共通して、友だちや教師等の周りの人と共に学ぶこと、したいことや思いを言葉や行動で表現することの必要性が見て取れる。そこで、小学部でつきたい力を「共に学び、自分を表現する力」と設定した。

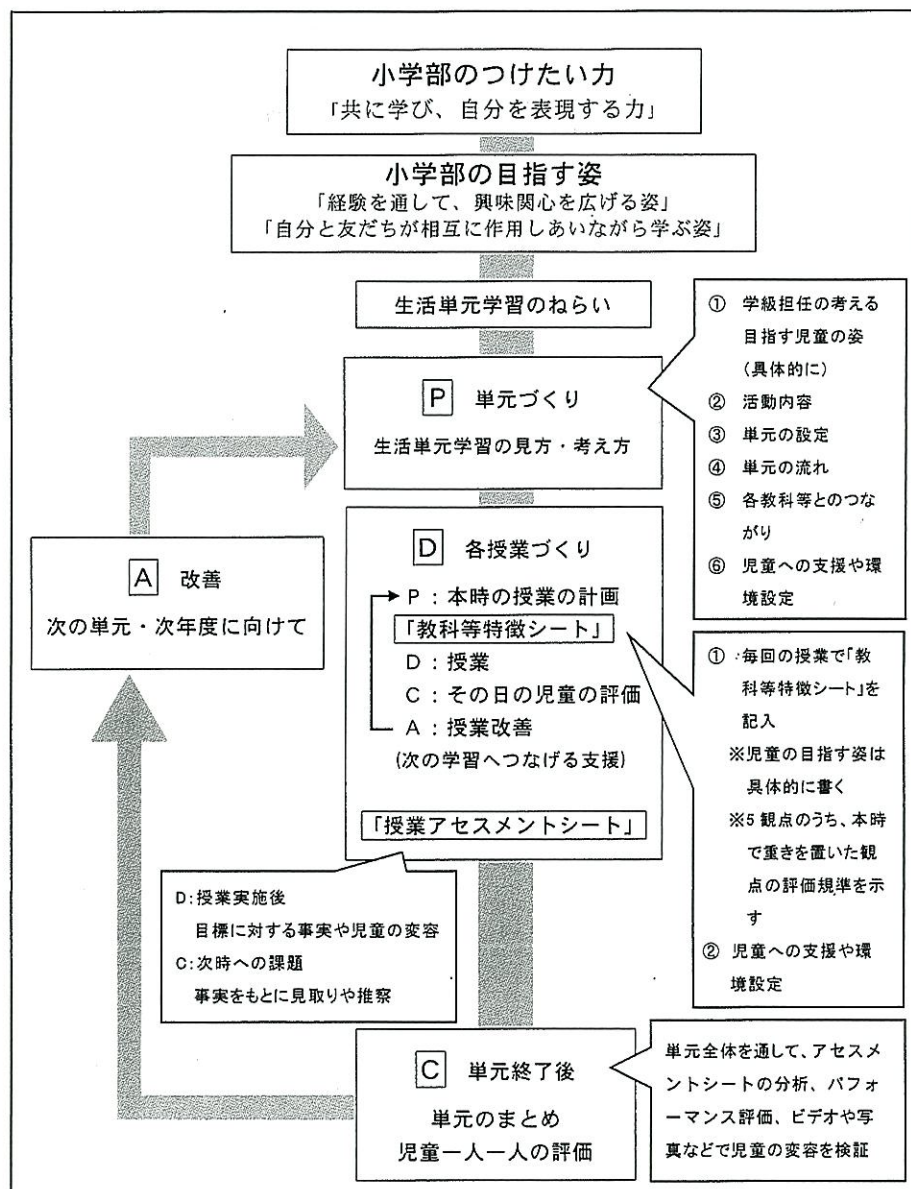
(3) 小学部の授業づくり

小学部では、「共に学び、自分を表現する力」を育成することを目指している。このためには「経験を通して、興味関心を広げる姿」「自分と友だちが相互に作用しあいながら学ぶ姿」が重要な要素であると考えている。つまり、児童が、①新しいことを体験したり、挑戦したりすることを楽しさを感じてまたやってみようと経験を重ねることや、②集団で同じ場を共有する段階から模倣や気持ちの共感等を経て、「楽

しい思いを誰かに伝えたい」という思いを持てることを大切にしたいと考えている。

また、本校が過去に実施したキャリア教育研究の知見により、児童が主体的・対話的に活動するためには新たな知識・技能の獲得による既有知識や自己認識の更新のための指導・支援の在り方が大切であると考えている。

つまり、授業づくりにおいては、まず授業のテーマについて、教師が提示した情報を既有知識や自己認識とすり合わせ、これからの活動に向けた新たな物の見方や考え方、技能を十分に獲得できる活動の上に、得た知識や技能を使って、思考・判断し表現する活動を用意するという流れで構成していくことが重要であると考えます。これを踏まえ、PDCA サイクルを行いながらつきたい力に向かった授業づくりを行うこととした（図VI-1-1）。



図VI-1-1 授業づくりの構想図

2. 生活単元学習の実践

(1) 単元設定にあたって

①単元設定までの経緯

本学級は、5年生3名、6年生3名、計6名の複式学級である。本学級では生活単元学習の授業において、野菜の栽培や収穫、調理の一連の活動、夏休み期間に実施する宿泊学習（以降、合宿と表記）に向けての事前学習等の活動に取り組んできた。これまでの学習経験から、子どもたちはこれらの活動や行事を楽しみにし、学級の友だちと一緒に取り組む様子がうかがえた。

7月に、子どもたちが心待ちにしている合宿の事前学習の一つとしてサンドイッチを作る活動を行った。朝食として取り上げたサンドイッチは、パンに具材をはさむことでできる手軽な料理の一つである。中にはさむ具材も多様で、子どもたちの好きな具材や調理スキルに応じたものを用意することができる。実際には、ウインナーを茹でたり、ツナをマヨネーズで和えたり、きゅうりを薄切りしたり、できた具材をロールパンにはさんだりした。そして、それらの活動を通して、お玉や包丁、トング等の調理用具の使い方や、これらの調理方法を学ぶことができた。夏休みに行われた合宿当日には、サンドイッチを作ることに見通しを持って取り組み、にこやかな表情で自分たちが作ったサンドイッチを食べる姿が見られた。

合宿の事前学習から始まったサンドイッチ作りであるが、小学部のつきたい力「共に学び、自分を表現する力」の視点から振り返ると、友だちや教師の様子を見たり共に活動したりする中で、「おもしろそう」「私もやってみたい」という思いや好奇心を持ち、自分の取り組みたい工程を選択し、伝えたり表現したりする姿を見ることができた。これらの学習活動を経て、子どもたち自身が活動性を高め、ゆで卵の作り方やきゅうりの切り方等、調理に関する知識の獲得やスキルの向上等、児童個々の変容をうかがうことができた。また、「〇〇ちゃんにあげたい」という気持ちが芽生え始めた児童も見られた。



図VI-2-1
ゆで卵の殻をむく児童



図VI-2-2
マヨネーズを絞り出す児童と
きゅうりを切る児童

②単元設定の理由

サンドイッチ作りを通して、調理に関する知識を獲得し、スキルを向上させている子どもたちであるが、他者に対して自分の思いや気持ちを上手く表出できなかったり、相手の思いや気持ちに気づかず自分の思いだけで接したりと、人間関係の形成の面において課題が見られた。自分たちが自信を持って作ったサンドイッチを、下級生の友だちや教師、家族に食べてもらい、「おいしい!」「ありがとう!」と喜ばれる経験を通して、嬉しい気持ちや楽しい気持ちを共有したり、相手の思いや気持ちに気づいたり理解したりすることで、これからの他者との良好な関わりにつながっていくことを願い、新たな単元

「〇〇さん、サンドイッチどうぞ」を設定した。

前単元のサンドイッチを作って食べる活動を学級内で完結させるのではなく、他の学級へと広げ、子どもたちの活動性がより高まるように展開する。

(2) 単元の計画

①単元の目標と評価規準

単元の目標および評価規準を次のように設定した(表VI-2-1)。小学部のつきたい力「共に学び、自分を表現する力」を踏まえ、本単元の評価規準は「選び、表現する力」「人と関わる力」「主体的に学習に取り組む態度」と設定している。

また、これらの評価規準の項目と、新学習指導要領の3観点との関連は次の通りである。

【選び、表現する力】…「思考・判断・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」

【人と関わる力】…「知識及び技能」「主体的に学習に取り組む態度」

表VI-2-1 単元の目標と評価規準

単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちや先生、家族等の身近な人にサンドイッチをあげることがわかり、相手が希望するサンドイッチを作ることができる。 ・サンドイッチをあげた相手が喜んでいことに気づいたり、相手の喜ぶ姿を見て嬉しい気持ちになったりする。 	
単元の評価規準	選び、表現する力	サンドイッチをあげたい対象について他者に伝えたり、表現したりしている。
	人と関わる力	サンドイッチをあげたい対象に、サンドイッチの種類を尋ねたり、サンドイッチを渡したり、一緒に楽しく関わったりしている。
	主体的に学習に取り組む態度	身近な人にサンドイッチをあげることを意識しながら作ったり、自らサンドイッチをあげたりしようとしている。

②単元の構成と活動の流れ

本単元は、次の通り、第一次と第二次で学習活動を構成する(表VI-2-2)。

表VI-2-2 単元の構成と主な学習活動

	主な学習活動 (総時数 20 時)
第一次	友だちや先生にサンドイッチを作ってあげよう (14 時) <ul style="list-style-type: none"> ・クラスの友だちや先生にサンドイッチを作ってあげよう (#1) ・2組の友だちや先生にサンドイッチを作ってあげよう (#2、#4、#5) ・1組の友だちや先生にサンドイッチを作ってあげよう (#3、#7) ・サンドイッチの材料を買いに行こう (#6)
第二次	家族にサンドイッチを作ってあげよう (6 時) <ul style="list-style-type: none"> ・サンドイッチの材料を買いに行こう (#8) ・飲み物を買いに行こう (#9) ・お父さんお母さんにサンドイッチを作ってあげよう (#10)

第一次では、学校生活で一緒に活動している下級生や教師の中から、あげたい対象を選んで決め、その対象にサンドイッチを作ってあげる活動を行う。授業#1では、まずクラス内の友だちや教師を対象とするが、活動を通して「1組や2組の友だちや先生にもサンドイッチをあげたい」という気持ちを引き出したり高めたりする。「下級生や先生にあげるためのサンドイッチを友だちと一緒に作る」「対象の人

が食べたい具材のサンドイッチを作ってあげる」「サンドイッチをあげた対象と一緒に食べることで嬉しい気持ちを共有する」等、個々の児童によってねらう目標は異なるが、嬉しそうな表情で喜ぶ対象の姿を見たり、対象に感謝の言葉をかけてもらったりする経験を重ねていくことができるように構成する。

第二次では、サンドイッチをあげる対象を、家庭生活と一緒に過ごす最も身近な存在である家族とする。大好きな家族が喜んでいる姿を見て嬉しい気持ちが増し、家庭生活においても家族に「喜んでほしい」「何かをしてあげたい」という気持ちを高め、生活がさらに豊かになっていくことを願う。

表Ⅵ-2-2で示している授業（#1～5、#7）における主な活動の流れは次の通りである。

表Ⅵ-2-3 授業内の主な活動の流れ

授業内の主な活動の流れ（#1～5、#7）	
1)	○組の友だちや先生にサンドイッチをあげることを知る
2)	サンドイッチを作る（自分が食べるものを含む）
3)	あげる対象を決める
4)	あげる対象を呼びに行く
5)	対象に食べたいサンドイッチの種類を尋ねる、対象のサンドイッチを作る、対象に渡す
6)	サンドイッチを対象と一緒に食べる
7)	活動を振り返る

（3）授業の様子

①A男について

（ア）A男の実態と単元目標、評価基準

5年生男児である。休み時間には、プレイルームでミニトランポリンを、なかよし広場（中庭）で虫採りやブランコをして遊んでいる。友だちや教師との関わりも見られるが、一人で遊ぶことが多い。コミュニケーション面においては、自分の思いがあっても遠慮した形で発信する傾向がある。教師の問いかけに対しては、「～する」「～した」等の叙述的な表現はできるが、反響言語（エコラリア）を発する傾向がある。友だちとの関わりの面では、活動への参加を促したり、することを教えてあげたりする姿が見られる。1年生のG男とは同じ放課後等デイサービスで一緒に過ごしており関心がとても高く、学校生活で好意を持って働きかけるが、G男に受け入れてもらえない様子が時々見られる。

表Ⅵ-2-4 A男の単元目標と評価基準

A男の単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・あげたい対象が選んだ具材をはさんで、サンドイッチを作ることができる。 ・自分の作ったサンドイッチを食べた対象に喜んでもらい満足感を得る。 	
A男の単元の評価基準	選び、表現する力	サンドイッチをあげたい対象を決めて、他者に伝える。
	人と関わる力	サンドイッチをあげたい対象に、サンドイッチの種類を尋ねたり、サンドイッチを渡したり、一緒に楽しく食べたりして関わる。
	主体的に学習に取り組む態度	身近な人にサンドイッチをあげることを意識しながらサンドイッチを作ったり、自らサンドイッチをあげたりしようとする。

（イ）A男の授業の様子

本単元「〇〇さん、サンドイッチどうぞ」では、自分が作った自慢のサンドイッチを「他者にあげて食べてもらう」場面を設定し、この中で他者、特に関心の高いG男との、関わる力の向上をねらった。

#1の授業後、友だちの「〇〇ちゃんにあげたい」という発言を聞いて、G男に対する関心が高いA男

も「Gちゃんにあげたい」と同様に発言した。

#3の授業では、好意のあるG男にサンドイッチをあげることを決め、初めて呼びに行く場面では、他の用事で遅れていたG男を待って熱心に手招きして誘っていた。

授業#2、#4、#5で他児と一緒にサンドイッチを食べる場面では、対象にあまり視線を向けることはなかったが、授業#3、#7のG男の近くで食べる場面では、視線を向ける度合いが大きく、とても嬉しそうに拍手して喜ぶ様子をうかがうことができた(図Ⅵ-2-3)。

#7の授業で、G男にメニュー票から選んでもらい、3種類から選んだウインナーのサンドイッチを差し出すと、G男は「ありがとう」と言って、A男の目の前で食べた。サンドイッチを食べ終わり教室を離れる際には、廊下の窓からA男がG男に向かって手を振り、G男もA男に対して手を振り返す姿が見られた(図Ⅵ-2-5)。A男が自分の教室に戻る途中、何かを口の中に入れるジェスチャーをしていた。振り返りの場面では、「Gちゃん、食べてくれたね」「ウインナーもぐもぐしとった」とA男の発言と喜ぶ姿をうかがうことができた。

(ウ) 単元におけるA男の変容と考察

G男に対する関心や好意、「関わりたい」というA男の思いは、他児に対する思いとは異なり強いものであるが、友だち発信の関わりをあまり好まないG男にとって、A男からの働きかけは応じ難い一面があると見取った。そこで、本単元では、A男が作ったサンドイッチを「G男にあげる場」や「G男に食べてもらう場」を設定した。G男に対し言葉をかけることはなかったが、サンドイッチのウインナーをゆっくりと食べるG男の様子をずっと見守っていた。A男の「G男にあげたい」「G男に食べてもらいたい」という思いがG男に受け入れられ、さらには「おいしい」「ありがとう」というG男の賞賛や感謝の言葉を聞くことができた。

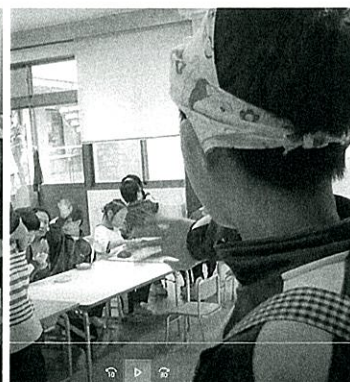
振り返り場面ではA男の感想を具体的に聞くことはできなかったが、G男がサンドイッチを食べる場面を再現しているかのようなA男の行動や喜ぶ姿から、G男とのやりとりからの満足感を得ることができたのではないかと推察する。本単元においては、両者が自発的に手を振り合う姿から、僅かではあるが、A男、G男ともに良好な関わりに近づいたと言えるのではないかな。



図Ⅵ-2-3
G男が食べる様子を見つめるA男



図Ⅵ-2-4
G男にサンドイッチを差し出すA男



図Ⅵ-2-5
互いに手を振るA男とG男

②B子について

(ア) B子の実態と単元目標、評価基準

5年生女兒である。学習場面では活動の動き出しが遅れ、促されて行動する面もある。愛嬌のある性格で、親しい友だちや教師とのやりとりを楽しんでいる。教師に伝えたいことやしたいことがあるとき

には、早口ではあるが指さしやジェスチャーも交え積極的に発信している。自信を持って活動に取り組んでいる際、力強く「よし！」と言うことがある。顔や腕を左右に大きく振って嬉しさを表現したり、興味関心のあることに速い足取りで行動したりする姿が見られる。

表Ⅵ－２－４ B子の単元目標と評価基準

B 子 の 単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ あげたい対象を選び、その対象にサンドイッチをあげることを理解できる。 ・ サンドイッチをあげた対象と一緒に食べて、相手が喜んでいることを感じる。 	
B 子 の 単 元 の 評価基準	選び、表現する力	サンドイッチをあげたい対象を決めて、伝えて表現する。
	人と関わる力	サンドイッチをあげたい対象に、サンドイッチを渡したり、一緒に楽しく食べたりして関わる。
	主体的に学習に取り組む態度	身近な人にサンドイッチをあげることを意識しながらサンドイッチを作ったり、自らサンドイッチをあげたりしようとする。

(イ) B子の授業の様子

本単元では、友だちや先生にサンドイッチをあげることを理解し、一緒に食べることを楽しみながら他者と関わることをねらいとした。

#1の授業では、クラス内の「友だちにあげる」という学習活動であったが、B子は友だちを選択せず、「Bちゃん」と言って自分の顔写真を選び、自分が作ったサンドイッチを自分で食べることとなった。#3、#5、#7の授業では、あげる対象として、他クラスの友だちや教師を選ぶことができ、サンドイッチを作ることに意欲的に取り組んでいた。メニュー票を見せて対象に好みを尋ねるというより、自分の好みのサンドイッチを奨めるB子だったが、渡すサンドイッチを足早に届けに行き、早く食べてもらいたいという積極的な様子が見られた(図Ⅵ－２－５)。そして、食べる場面では、手渡した対象と顔を見合わせてにこやかな表情を見せたり、顔や腕を左右に大きく振って嬉しさを表現したりしていたが、授業#7では、対象の教師がサンドイッチを食べる様子に注目して、「どう?」「おいしい?」と嬉しそうに尋ねて関わる姿も見られた。



図Ⅵ－２－５
かつての担任にサンドイッチを渡すB子



図Ⅵ－２－６
「おいしかった」と声をかけられ喜ぶB子

(ウ) 単元におけるB子の変容と考察

B子は「サンドイッチを作りたい、食べたい」という思いから、サンドイッチを作る場面では、茹で上がった卵をお玉ですくい上げようと努めたり、友だちがつぶしたゆで卵にマヨネーズをかけて和えたりと意欲的に取り組んできた(図Ⅳ－２－２)。

#1の授業では、クラス内の「友だちにあげる」という教師の意図を理解できなかったようだが、#3以降の授業では、他クラスの友だちや教師を選ぶことができたことから、サンドイッチをあげることが分

かったのではないかとと思われる。自分の好みのサンドイッチを奨めたり、対象の教師が選んだものを足早に届けに行ったりしたことは、「〇〇先生に食べてほしい」という B 子の思いの表れではないかと推察する。授業#3、#5 の食べる場面では、手渡した対象と顔を見合わせてにこやかな表情を見せたり、顔や腕を左右に大きく振って嬉しさを表現したりして、「一緒に食べていることが嬉しい、楽しい」という気持ちを対象と共有している段階であったが、授業#7 の B 子は、食べている対象に自ら「どう?」「おいしい?」と積極的に働きかけて関わっていた。対象からの「おいしい」「ありがとう」という賞賛や感謝の言葉を期待しての働きかけであろうと推察する。本単元においては、選んだ対象を意識した「一緒に食べることが嬉しい、楽しい」という気持ちや、「一緒に食べたい」「サンドイッチを食べてもらいたい」「おいしい、ありがとうと言ってもらい、褒められたい」という思いが、B 子の積極的な関わりや行動を引き出したのではないかと考える。

(4) 授業および単元の評価について

小学部のつきたい力「共に学び、自分を表現する力」を踏まえ、単元を評価する。

合宿の事前学習から始まったサンドイッチ作りであるが、前単元で子どもたちは、友だちや教師の様子に注目したり共に活動したりして相互に作用しあう中で興味・関心を広げ、「サンドイッチを作りたい、食べたい」「おもしろそう」「私もやってみたい」という思いや好奇心（要求）を持って、自分の取り組みたい調理工程を伝えたり表現したりし、調理に関する知識の獲得やスキルの向上を促進させてきた（既有知識の更新）。これらの学びによって、子どもたちはサンドイッチを作る工程において自信（自己効力感）を持ち、自己に関する認識を新たなものにしていった。

本単元「〇〇さん、サンドイッチどうぞ」では、自分が作った自慢のサンドイッチを「他者にあげて、食べてもらおう」場面を設定し、この中で他者と関わる力の向上をねらった。学級集団の中で他児の言葉に耳を傾けながら、子どもたちは、「〇〇さん（先生）にサンドイッチをあげたい」「〇〇さん（先生）にサンドイッチを食べてもらいたい」と他者に対する思い（要求）を膨らませていった。自分が選んだサンドイッチをあげたい対象に嬉しそうに届けたり、対象と一緒に食べることを楽しんだり、自分なりの表現方法で対象と関わったりし、自身の活動性を向上させ、主体的に行動しようとする姿をうかがうことができた。また、他者に働きかけ、嬉しそうな表情で喜ぶ対象の姿を見たり、対象に感謝の言葉をかけてもらったりする経験を重ねてきた結果、「理解」するまでには至らなかったが、相手の思いや気持ちに気づいたり、他者と嬉しい気持ちや楽しい気持ちを共有したりすることができたのではないかと考える。

一方で、サンドイッチ作りには積極的に取り組み、調理に関する知識やスキルを向上させたものの、「食べたい」思いが強くマヨネーズに執着し、「サンドイッチを作りたい、食べたい」段階から、他者に「サンドイッチをあげたい」段階への移行に至らなかった児童も見られた。

小学部のつきたい力「共に学び、自分を表現する力」を育むために、単元を通して子どもたちが学べるべき事柄や、各教科の見方・考え方を学習活動に活用する授業分析について、今後も検討していきたい。

3. 成果と課題

(1) 成果

小学部では、つきたい力として「共に学び、自分を表現する力」と設定している。つきたい力を育成するために、経験を通して興味関心を広げること、自分と友だちが相互に作用しあうことを大切にしてこれまで授業づくりを行ってきた。

また今年度は、特に小学部における深い学びとは何かについて年度当初より議論を重ねてきた。

「共に学び、自分を表現する力」とは具体的な活動の中でのどのような姿なのかを考え、常に意識しながら、授業づくりを行った（表VI-2-1 単元の目標と評価規準）。そして各シートを活用し、小学部全員で検討して目標や適切な支援の在り方を模索しながら、授業づくりを進めていった。1回の授業で児童に変化が見られることは難しいため、単元全体を通じて、ねらいの確認、実践、振り返りを重ねるというPDCAサイクルにより指導や支援の仕方を模索しその中で児童の姿が見えてくることも多かった。成果を整理すると以下ようになる。

① つけたい力の育ちについて

3組の実践は、夏の合宿での朝食作りにサンドイッチという題材を選んだことからスタートした。3組の6名は、夏の合宿の単元で、合宿の準備や企画をしたり、サンドイッチの調理方法を学んだりした。次に、うまく作れるようになったサンドイッチを、自分があげたい人に作ってあげ、嬉しい気持ちや楽しい気持ちを共有したり、相手の思いや気持ちに気づいたり理解したりすることで、これからの他者との良好な関わりに繋がることを願って「友だちや先生にサンドイッチをあげよう」という単元へと発展させた。この単元の中で、児童が作ったものを、あげたいと思う相手に食べてもらうというだけでなく、食べたいと思うサンドイッチの具材を選んでもらい、その要望に応じて、自分で作ることとした。どのようにして3種類の具材の中から選んでもらったら良いか、児童同士や教師との関わりがスムーズになるために、実物を提示するのが良いか、メニューのように写真があったら良いか等、教師間で話し合い、授業で試行した。初めは提示した見本を手にとってしまったり、何から選んで良いのかわからずに戸惑ったりする姿も見られた。また、児童自身がまずサンドイッチを食べたい欲求があるので、自分が食べた後で友だちや教師、家族に作ってあげるのが良いとわかり、授業の流れを考慮したりもした。

児童は、これらの活動を通して、自分自身がおいしく食べられるだけでなく、大好きな友だちや家族が喜ぶ場面を共有することができた。好きな人と一緒に楽しくサンドイッチを食べるという経験を通して、相手の求めるものを知り、それに応え自分が活動することで、相手は喜び満足してくれ、自分もまた嬉しい気持ちになるという新しい自己認識を得ることに繋がった。相手の喜ぶサンドイッチを作ることができるという自己効力感が高まることで、児童がより関わりを持とうとする要求を持ったり活動性を高めたりする。このような「育ち」のプロセスを繰り返す行いによって、小学部におけるつけたい力（高学年）「みんなで一つの物を作ったり、一つの事を成功させたりするために活動に取り組む中で、達成感を感じたり、思いを伝えたりする力」に迫ることができたのではないだろうか。

② 学びについての考察

それまで好きな友だちとうまく関わりを持てなかった児童が、手順を理解し作り方のスキルを身に付けたサンドイッチをその児童の要望に応じて作ってあげることで、両者とも満足感のある場を共有することができ、相手が嬉しい気持ちになったことを実感することができた。「仲良くなりたい」「もっと関わりたい」という児童の要求は、今回のサンドイッチをあげる授業実践によって関わり方についての自己認識が新たになり、自分の気持ちを伝えるだけではなく、相手が喜ぶことをすることで、相手の笑顔や感謝の表現が得られ良好な場が持てることを実感した。

言葉でうまく表現できない児童に伝えることを教師が支援したり、継続して機会を設けたりすることで、児童は自分の行動が相手の喜びに繋がったという実感を得ることができた。今回のサンドイッチ作りに関連した学習において、まずサンドイッチの作り方を知り、何度も繰り返し作ることでうまく作れたという自信が生まれた。そして、相手の欲しいものをあげるという相手の思いを意識した行動は相手

を喜ばせ、自分の喜びにもなるという新しい知識が結びつき、児童の次の学習への意欲的な言動に繋がったと考える。これは本校が目指す、いろいろな知識と知識が結びついていく深い学びの一つの在り様であると思われる。またこの経験はさらに主体的に表現するための力となってもものと思われる。

（２）課題

① シートの活用

教科等特徴シートと授業アセスメントシートは、記載していくことで子どもへの支援の在り方や次の授業の作り方が見えてきて有効であったが、対象児童を２名に絞ったものの、記載したり検討したりすることに毎回かなり多くの時間を必要とした。２つのシートを日々さらに活用しやすいものにし、より分かりやすく表すための内容や様式の精査も課題の一つと言える。

② 単元の繋がり

本校ではこれまで、「要求」「既有知識」「自己認識」「自己効力感」という４つの要素で内面を捉えてきた。日々の授業での児童の姿をシートを通して追いながら内面世界を探究し、今回は確かに児童の変容を見とることができた。しかしながら、この単元の後、今回の児童の学びが次の学習や活動の場面の中でどのように活かされ、表れるのだろうか。定着したのか、さらに変化していくのか、短いスパンではなく、さらに長いスパンで追って見ていくことが必要ではないだろうか。一つ一つの単元や授業を次に繋げていくことで、学びが確かに定着し力となっていく単元計画や実践が必要だと言える。

③ 今後に向けて

児童が自分を理解したり、他者へ意識を向けたりしていくことは、この授業や単元だけでなく、多くの学習場面や生活場面等で獲得が期待できる。教師は日常的な学びの中でそのプロセスを見取っていく必要がある。深い学びを得るために、児童が「わかる」「実感する」「感じる」ためのプロセスや、確実な振り返りの工夫が今後さらに必要であり、児童が学校生活全般で自分の思いを伝える主体的な姿勢や自己表現、人との関係性を求める姿勢へとさらに繋がっていくよう、研究を深めていきたい。

参考文献

1. 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属特別支援学校 研究紀要（2018）
2. 越野和之（2018）発達保障論の到達と論点 全障研研究推進委員会【編】全国障害者問題研究会 出版部

4. 資料

(1) 学習指導案

小学部 3 組 生活単元学習 学習指導案

日 時： 令和元年 10 月 25 日（金） 11:25～12:05

授業者： 山本 彩恵子（T1）、三宅 和憲（T2）

松浦 千賀（T3）

場 所： 小学部 3 組教室

1 単 元 「〇〇さん、サンドイッチどうぞ」

2 単元設定の理由

・（児童観）

本学級は、5 年生の女子 2 名と男子 1 名、6 年生の女子 3 名の計 6 名で構成されている。どの児童も、教師とのやりとりが主であり、程度に差はあるが、簡単な日常会話のやりとりができる。教師との日常会話の内容には、休日の家族とのできごとや両親との関わり等についてのものも多く、家族がどの児童にとっても大切な存在であることがうかがえる。友だちとの関わりについては、自分の気持ちが出せず消極的な関わりが多い児童や、表現方法が未熟で相手の気持ちを考えない行動が見られる児童もいるが、何かを教えてあげたり簡単なやりとりを楽しんだりする様子も見られるようになってきた。さらに、他学年の児童や教師にも関心があり、自分から呼びかけたり話しかけたりする姿も見られるようになり、関わろうとする対象の広がりを感じる。

どの児童も食べることが好きで、調理活動に興味や関心があり、特に意欲的に取り組む。夏休み中の合宿時に朝食として、ウインナー、きゅうり、ツナマヨなどの具材をはさんだサンドイッチを作って食べた経験があり、調理過程については、どの児童もおおむね理解して取り組んでいる。

・（単元観）

サンドイッチは、パンに好きな具材をはさむだけでできる料理であり、工程も簡単である。本単元で扱うサンドイッチは、食パンに具材をはさむサンドイッチではなく、ロールパンの上の切れ込みに具材をのせるだけにすることで、児童が一人でも作ることができる。また、箸やスプーン等がなくても手で簡単に食べられるものであるため、児童にとっては馴染みやすい食べ物である。

児童が作ったサンドイッチは、自分で食べたいと思うほど、児童にとっては価値のあるものであり、それを他者にあげることを題材にすることで、さらに相手を意識することにつながっていくと考える。自分が作ったサンドイッチをあげたい相手を決め、自分があげた相手に喜んでもらえることで、自分も嬉しい、一緒に食べて楽しいという気持ちを感じる。それが今後の友だちや教師、家族との関わり方や、学習へのさらなる意欲へとつながっていくことも期待し、この単元を設定した。

・（指導観）

児童の中には、友だちが嫌がっていても相手の思いや気持ちに気づかずに自分の思いだけで接してしまう児童や、教師の気を引くために注意されるような行為をする児童もいる。本単元で、下級生やいろいろな教師、家族等と関わり、自分の行為で相手に喜んでもらうという経験を通して、相手の思いを理解し、良好な関わり方の気づきや嬉しい気持ちの共有ができるようになっていくことを期待し

たい。

第一次の活動では、教師や下級生で自分があげたい人にサンドイッチを作ってあげる活動を行う。選んだ相手が食べたいサンドイッチを作ってあげる、あげるためのサンドイッチを作る、自分が好きな人と一緒にサンドイッチを食べることで嬉しい気持ちを共有するなど、児童によってねらうところは異なってくるが、相手が嬉しそうな顔をしたり感謝の言葉をかけてくれたりして喜んでもらえるという経験を積み重ねていくことで、気持ちの安定や他者との適切な関わり方へつながることを期待したい。

第二次では、児童にとって、学校の友だちや先生よりも、さらに身近な存在である家族にサンドイッチをあげる活動を設定する。一次で友だちや先生にサンドイッチをあげて喜んでもらえる経験を重ねることで、同じように自分の大好きな家族にもサンドイッチをあげ、喜んでもらいたい、一緒に食べたいという気持ちにもつながるのではないかと考える。自分が作ったサンドイッチを家族に食べてもらい、喜んでもらえる経験をする中で、家族についても意識を深めていき、家庭生活の中で家族を意識し、さらに生活が豊かになっていくことを期待している。

3 単元の目標

- ・友だちや先生、家族等の身近な人にサンドイッチをあげることが分かり、サンドイッチを作ることができる。
- ・サンドイッチをあげた相手が喜んでいことに気づいたり、相手の喜ぶ姿を見て嬉しい気持ちになったりする。

4 単元の評価規準

選び、表現する力	人とのかかわる力	主体的に学習に取り組む態度
・サンドイッチをあげたい相手を選んで伝えたり、表現したりすることができる。	・サンドイッチをあげたい相手に、サンドイッチの種類を尋ねたり、サンドイッチを手渡したりして、一緒に楽しく関わることができる。	・身近な人にサンドイッチをあげることを意識しながらサンドイッチを作ったり、自分からサンドイッチをあげたりしようとする

【選び、表現する力】⇒ 思考・判断・表現力等 主体的に学習に取り組む態度

【人とのかかわる力】⇒ 知識及び技能 主体的に学習に取り組む態度

5 単元の評価方法

観察法（発言、ビデオ、教師による）

6 児童の単元に関する個別実態及び目標

	本単元に関する実態	本単元の個別の目標
A (男)	・教師や友だちに自分から話しかけることは少なく、友だちの言動に合わせたり、教師からの指示を待ってから行動したりする等の受け身な言動が多い。友だちや特定の下級生に、することを自分から教えてあげたり次の活動を促したりするような関わりをする様子も見られるようになってきた。	・サンドイッチをあげたい相手が選んだ具材をはさんで、サンドイッチを作ることができる ・自分の作ったサンドイッチを食べた相手に喜んでもらった満足感を得る

B (女)	・活動時には促されて行動することが多いが、自分で教師に伝えたいことがある時や、したいことがある時には、積極的に単語と指さしやジェスチャーで伝えようとする。家族と行ったところやしたことを話題にすることが多い。自分で自信を持って取り組んだ動作や活動の後に、「よし」と発言することがある。	・サンドイッチをあげたい相手を選び、その人にサンドイッチをあげることを理解できる ・サンドイッチをあげた相手と一緒に食べて、喜んでもらったことを感じる
C (女)	・人への関心があり、特に好きな児童や教師の行動を気にする様子がよく見られる。相手の気持ちを考えた言動は難しいが、相手が怒ったり喜んだりしていることは分かる。友だちとは、名前を呼んだり触れたりしてコミュニケーションをとろうとすることが多い。教師には、自分が話したい話題について2語文で聞くことが多いが、話題は限られており、多様な内容のやりとりや自分の思いを伝えることには課題がある。	・友だちや先生、家族にあげることを理解しながら、サンドイッチを作ることができる ・サンドイッチをあげた相手と一緒に楽しく食べる
D (女)	・教師と会話することが好きで、家で起こったことや誰かに聞いたこと、友だちの様子で気になること等を話題にすることが多い。人の発言や過去の経験等を覚えており、関連したタイミングで思い出して話題にすることもある。友だちに何かを教えてあげたり、次の活動を促したりするような声かけも増えてきているが、相手の気持ちを察することはまだ難しい。自分がしたいことや、したくないこと等を伝えることができ、ほめられたり喜ばれたりすることで次の行動に意欲的に取り組む。	・サンドイッチをあげたい相手を選んだ具材のサンドイッチを間違わずに作ることができる ・自分が作ったサンドイッチをあげたことで、相手に喜んでもらったことが分かり、嬉しい気持ちになる
E (女)	・他者を意識した言動が難しく、教師との簡単なやりとりが多いが、教室移動の際などにはペアになる児童を気にかけるような様子が少しずつ見られるようになっている。自分のしたいことをすぐに直接行動に移すことがあるが、決まった場面では、教師に依頼したり確認したりしようとする様子も見られる。教師の手本や見本の写真等を見て、活動のイメージを持つことができ、手本や見本と同じようにしようとする。	・あげたい相手を選び、あげることを理解してサンドイッチを作ることができる ・あげたかった相手と一緒に食べる中で、喜んでもらったことを感じる
F (女)	・友だちや教師と関わるのが好きで、家で起こったことなどを言葉とジェスチャーで教師に伝えようとする人が多い。自分の思いや感情をうまく言葉で伝えられず、集団の活動での行動調整や、次の行動にスムーズに移れないこともある。また、友だちが嫌がっていても、自分の思いだけで接してしまうことがある。	・サンドイッチをあげたい相手のことを意識しながらサンドイッチを作ることができる ・自分が作ったサンドイッチをあげたことで、相手に喜んでもらったという満足感を感じる

7 単元計画（総時数20時間）

次	時	主な学習活動	評価の観点			備考
			知識・技能	思考・判断・表現	主体的な態度	
一	14	友だちや先生にサンドイッチを作ってあげよう ・クラスの友だちや先生にサンドイッチを作ってあげよう	○		○	

		・ 1組や2組の友だちや先生にサンドイッチを作ってあげよう	○	○		本時 (10/14)
		・ サンドイッチの材料を買いに行こう	○		○	
二	6	家族にサンドイッチをあげよう ・ サンドイッチの材料を買いに行こう ・ 飲み物を買いに行こう ・ お父さん、お母さんにサンドイッチを作ってあげよう		○	○	

8 本時の学習 2組のみんなにサンドイッチをあげよう（第一次 8時）

（1）本時の目標と評価基準

目標	全 体	・ サンドイッチをあげた相手が喜んでいことに気づいたり、相手の喜ぶ姿を見て嬉しい気持ちになったりする	
	個 別	A（男） ・ 2組の児童や先生の中でサンドイッチをあげたい相手にサンドイッチをあげ、あげた相手が喜んでいことに気づく	B（女） ・ 2組の児童や先生の中でサンドイッチをあげたい相手にサンドイッチをあげ、一緒に楽しく食べる
本時の目標に対しての評価基準	観 点	評価基準	
	選び、表現する力	・ 相手の好きな具材を選んでサンドイッチを作り、手渡している	・ 自分がサンドイッチをあげたい人に自らサンドイッチを手渡しに行こうとしている
	人とかかわる力	・ 相手にあげたサンドイッチを食べてもらうことで、手を叩いたり、笑顔になったりする等嬉しそうな言動が見られる	・ 自分がサンドイッチをあげた人と一緒に会話したり笑顔になったりしながら楽しく食べている

（2）本時の展開

学習活動	教師の指導・支援及び配慮事項	
	A（男）	B（女）
1. 2組でサンドイッチをあげたい人を選ぶ	・ 選んだ人が分かりやすいよう、ホワイトボードに2組の児童と教師の顔写真と、3組の児童の顔写真が貼れるようにする。(T1)	
2. 準備をする ・ 2組の友だちや先生を呼びに行く ・ テーブルの準備をする	・ 児童の希望に沿って2組を呼びに行く係とテーブルの準備をする係に分け、自分たちで2組を呼びに行けるよう見守る(T1、2) ・ 2組の児童が座る場所が分かりやすいよう、テーブルを準備する係の児童と一緒に小ホールのテーブルの上に2組の児童の顔写真を置く。(T3) ・ 児童から主体的な言動が見られた時には、すぐにほめることでさらに自信を持って取り組めるようにする。(T全)	
3. 2組の好きな友だちや先生にサンドイッチをあげる	・ 2組の児童や教師に、好きな具材を聞いたり手渡したりすることができるよう、それぞれの児童に声かけや見守り等する。 (T1：A児・D児、T2：B児・C児、T3：E児・F児)	

<p>4. 2組の友だちや先生と一緒にサンドイッチを食べる</p> <p>5. 振り返りをする</p> <p>6. 終わりの挨拶をする</p>	<p>・ 2組の児童や教師に好きなサンドイッチを聞く時には、相手が選んだサンドイッチが分かりやすいよう、3種類のサンドイッチの写真カードを用意する。(T全)</p> <div data-bbox="1141 219 1436 421"> </div> <div data-bbox="430 443 928 542"> <p>・ 相手の好きな具材を選んでサンドイッチを作り、手渡す(選び、表現する)</p> </div> <div data-bbox="430 555 928 667"> <p>・ 相手に自分が作ったサンドイッチを自分から手渡せるよう、見守ったり声かけをしたりする。(T1)</p> </div> <div data-bbox="430 689 928 779"> <p>・ 2組の児童の反応を見ながら、「おいしそう」「嬉しそう」など様子を言語化して児童に伝える。(T全)</p> </div> <div data-bbox="430 790 928 947"> <p>・ N児に好きなサンドイッチをあげ、相手が喜んでいることで嬉しい気持ちを感じている(人とかかわる力)</p> </div>	<div data-bbox="954 443 1449 555"> <p>・ 自分がサンドイッチをあげたい相手にサンドイッチを手渡している(選び、表現する)</p> </div> <div data-bbox="954 577 1449 689"> <p>・ 相手のほしいサンドイッチを手渡すことができるよう、どれを食べたいのか一緒に尋ねる。(T2)</p> </div> <div data-bbox="954 790 1449 947"> <p>・ 自分がサンドイッチをあげたい人と一緒に楽しく食べている(人とかかわる力)</p> </div>

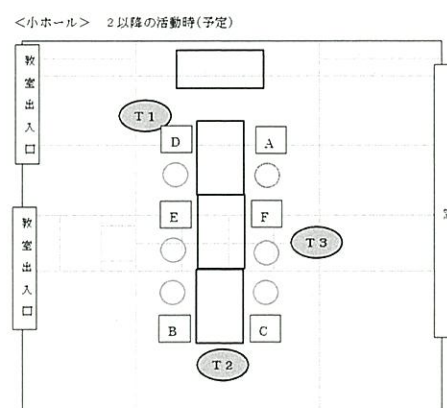
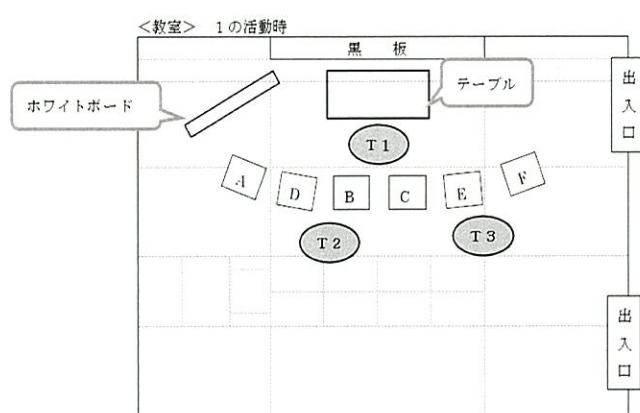
(3) 準備物

3組の児童の顔写真カード、2組の顔写真カード、白テーブル3台、椅子(小)12脚、ホワイトボード

9 授業づくりの評価(教師側)

- ・ 本時の個別の目標を達成できるような授業内容や支援であったか。

10 配置図



授業アセスメントシート (A児)

(1/2)

(2) 授業アセスメントシート

学部で付けたい力	共に学び、自分を表現する力
本単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちや先生、家族等の身近な人にサンドイッチをあげることができ ・サンドイッチをあげた相手が喜んでいいることに気づいたり、相手の喜ぶ姿を見て嬉しい気持ちになったりする

教科等特徴シート重点項目（重み付けが4、または5）

実施日時 (A)	本時の目標	教科等特徴シート内 授業構成観点	授業実施前 (P)	授業実施後 (D)		次への課題 (C)	その他 (授業の構成や支援方法について)
			授業計画時での教師の予想	どのような効果、変容があったのか			
10月9日 (水) 第一次	・友だちにあげることが意識しながら、サンドイッチを作る。	伝え合うことの喜び (対話的)	クラスの「友だちにあげる」ことを少しはイメージし、作ることができる。	・あげたい人を聞くと、移動のときによくペアになる児童を選んだ。サンドイッチを作る直前に誰にあげるのか聞く自分の名前を答えたが、あげる時には選んだ友だちの名前を覚えて渡すことができた。教師の声かけによって、友だちにあげてもらうことを意識することができた。 ・授業後、他のクラスの児童にもあげたいという発言がA児とD児からあった。		・友だちにあげて意識する。	・単元の導入段階として、クラス内の友だちにサンドイッチをあげる活動を行ったが、「あげる」ということへの意識は薄かった。他クラスの友だちを対象にすることで、あげることをより意識できるようにする。
10月17日 (木) 第一次	・2組の友だちにサンドイッチをあげることが分かる。	伝え合うことの喜び (対話的)	・授業の導入で、サンドイッチを他のクラスの友だちにあげることが伝わることで、誰かにあげることへの理解ができるのではないかと。	・あげる対象を決めるときには、2組の男児の名前を答えた。あげる場面では、あげるためのサンドイッチを自分で手に取ったまま周りの様子を見ていたが、教師に「誰にあげるの？」と聞かれるとすぐに、着席しているその子の前に置いた。自分の分とは別に、あげる分のサンドイッチを作ったことで、2組の友だちにあげることは分かっていた。 ・サンドイッチをあげた児童の向かいに座って自分のサンドイッチを黙々と食べていたが、美味しそうに食べているその子の方や、自分の隣に座っている2組の児童に視線を向けることもあった。サンドイッチをあげた児童が食べている様子を見て、少し嬉しそうな表情をした。		・相手が自分の作ったサンドイッチを食べていることが分かる。	・A児が関心のある1組のG児をあげる対象に選ばば、より意欲的にサンドイッチを作ったり、関心を持って相手の食べる様子を見たりするのはいいか。
10月18日 (金) 第一次	・自分が作ったサンドイッチをあげた相手が食べていることに気づく。	伝え合うことの喜び (対話的)	・1組のG児に、自分が作ったサンドイッチを食べてもらえらることで、嬉しそうな表情をする。	・あげる対象を、G児に決める。嬉しそうな表情で楽しみにした様子で、1組の児童を呼びに行くと、普段から関わりのあるG児をあげる対象に選んだことで、あげることにモチベーションは高かった。G児が何回か「ウインナー」と発言するが、あまり反応しない。教師が「Gさんウインナー食べた」と伝えたと立ち上がりウインナーサンドを作り、手渡すことができた。サンドイッチをなかなか食べないG児の様子をよく見ている様子は見られた。G児がウインナーを食べ「おいしい」という発言の後、少し笑顔が見られる。振り返りでは、「Gちゃんウインナー食べたね」と発言。		・G児が選んだサンドイッチがなかなか伝わっていないかった。	・写真のメニューカードの下に顔写真を貼ってもらうことで、どれを食べたいのかが分かりやすいのではないかと。

授業アセスメントシート (A児)

学部で付けた力	共に学び、自分を表現する力
本単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちや先生、家族等の身近な人にサンドイッチをあげることが分かります ・サンドイッチをあげた相手が喜んでくれることに気づいたり、相手の喜ぶ姿を見て嬉しい気持ちになったりする

教科等特徴シート重点項目（重み付けが4、または5）

実施日時 (A)	本時の目標	教科等特徴シート内 授業構成観点	授業実施前 (P)	授業実施後 (D)		次への課題 (C)	その他 (授業の構成や支援方法について)
			授業計画時での教師の予想	どのような効果、変容があったのか			
11月20日 (水) 第一次	・1組の児童や教師の中でサンドイッチをあげたい相手が選んだ。 ・具材をはさんだサンドイッチをあげたい相手にあげ、喜んでいうことに気づく。	伝え合うことの喜び (対話的)	・A児にとっと思いの強い、1組のG児を選ぶのではない。クラスの他の児童が、G児にあげたいと言っても、A児はG児を選ぶのでは。	授業が始まる前から、G児にサンドイッチをあげることについて決めている。(「1組にあげる」よりも「G児にあげる」という発言) ・G児にサンドイッチを渡し、G児の向かいで様子をしばらく見ている。G児がゆっくりウインナーときゅうりを食べる様子を写している。時々笑顔が見られる。 ・1組から帰るときに、手を振るA児にG児も手を振り返す。1組を出た後、手を大きく叩いたり、口に向かを入れる動作をしたりしながら3組の教室に向かっている。		・一番身近な存在である家族(お母さん)にサンドイッチをあげることで、相手の嬉しい、喜んでいう姿が分かりやすく、満足感を味わえるのでは。	・多様な具材を多く用意し、その場でお母さんが選んだ具材をはさんでサンドイッチを作ってあげ、隣に座って一緒に食べる。
11月29日 (金) 第二次	・お母さんにサンドイッチを作ってもらってあげてお母さんが喜んでいうことに気づき、満足感を味わう。	伝え合うことの喜び (対話的)	・G児以上に相手(お母さん)の様子をよく見て、サンドイッチをあげたり一緒に食べたりする場面で笑顔が多く見られるのでは。	・最初は恥ずかしいのか、隣に座ったお母さんと目を合わせず、反対の方を向いている。自分のサンドイッチを黙々と食べており、お母さんにあげた一つ目のサンドイッチは、お母さんが食べているところをあまり見ていない。 ・お母さんにあげた二つ目のサンドイッチは、自分の分を食べながらも手を叩き、お母さんが食べているところをよく見ている。 ・三つ目のサンドイッチは、作って手渡す前に、お母さんが手を叩いて喜んでいう姿を見ており、手渡した後に手を叩いて少しとびはねて嬉しそうにしている。他のお母さんたちにもほめられ、しばらく手を叩いたり笑顔になったりしている。その後は笑顔が多く見られる。 ・振り返りで「お母さん食べとった」と発言。		・お母さんにサンドイッチを作ってもらってあげることで喜んでくれた今回の経験を、今後の家族についての学習にもつなげていく。	